

## 第3分科会

# 岐阜市立長良西小学校



所在地 〒502-0832 岐阜市千代田町2丁目1番地

校長 和田 満

児童数 753名(25学級)

連絡先 TEL 058-232-5222 FAX 058-232-5227

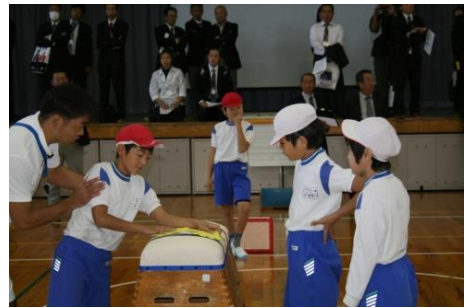
E-mail [gisyo34@nagara-w-e.gifu-gif.ed.jp](mailto:gisyo34@nagara-w-e.gifu-gif.ed.jp)

URL <http://cms.gifu-gif.ed.jp/>

nagaranishi-e/

### 【研究主題】

よりよい動きを求め続ける子



## 1 研究の概要

### (1) 研究主題

本校の新体力テストにおけるアンケートでは、以下のような結果が得られた。下記のことから、「運動に親しんでいる児童」と、「ほとんど運動しない児童」がいることが分かり、運動の二極化傾向がみられる結果となった。私たちは全ての子に「運動は楽しい」という経験を十分味わわせることで、「運動好きな子」を一人でも多く増やし、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てていきたいと考える。

運動・スポーツの実施状況	
(対象:H25年度3年生～6年生504名)	
・週3日以上	: 28% (143名)
・週1～2日	: 51% (259名)
・月1～3日	: 9% (47名)
・しない	: 11% (55名)

体育科教育では、「動く楽しさ、伸びる楽しさ、集う楽しさ、発見する楽しさ」を味わうことができる「楽しい体育」を授業づくりの基盤として、実践を充実させていきたい。楽しい体育の授業を進めるにあたっては、「子供たちが、自分の力に合った目当てをもち、練習方法や仲間との活動を工夫し、動きを高めていく過程」を大切に実践してきた。その中で、子供たちは、どうすれば動きを高めることができるかを考えて取り組み、そこで得られた自信は、その子なりの運動のコツや学び方として身に付き、次の学習に生かされたり、体を動かす機会の増加につながったりしていくことが分かった。

そこで、これまでの授業実践と子供の実態を踏まえ、テーマを「よりよい動きを求め続ける子」と設定した。

### (2) 研究仮説

小学校の「器械運動」と「ゲーム ベースボール型」において、基礎的な身体感覚や技能を磨きながら、各運動の身に付けたい動きを明確にした系統性のある単元指導計画を作成し、学習環境や動き言葉を活用しながら、動きをつかむ力を高めて学習に取り組んでいくことで、子供たちはよりよい動きを求め続け、運動の楽しさや喜びを味わうことができる。

### (3) 研究内容

- ① 運動の本質に基づく教材分析と系統性を重視した指導計画の作成
  - ア 身に付けたい動きを明確にした指導計画の作成
  - イ 単元指導計画に位置付ける準備運動の在り方
- ② 技能の向上に結び付く、思考・判断を高める方法の工夫
  - ア 動きをつかむ力を高める学習環境
  - イ 動きをつかむ力を高める動き言葉の活用

## 2 公開授業

### (1) 第1学年 器械器具を使った運動遊び「跳び箱ランド」

授業者 : 高橋 佑佳 教諭

跳び箱を使った運動遊びでは、踏み切りや支持などにより跳び箱を越す運動遊びを楽しく行うとともに、基本的な動きを身に付けたり工夫したりすることが課題となる。そのため、跳び

箱を活用しての跳び乗り・跳び下りや手を着いての支持跳び乗り下りなどの楽しさを意図的に取り入れた運動遊びを構成して行った。① 助走からの両足踏み切り、② 腰の引き上げ、③ 腕支持(瞬間的な支え)、④ 膝を曲げた両足着地の4つの運動感覚を、単元を通して身に付けたい動きに設定して単元を構成し、場や条件の変化によって自然にうまれる子供たちの意識を大切にすることで、跳び箱遊びの中で、楽しみながら動きを身に付けていくことが



できた。また、高める過程の中で仲間の動きを見ることにより、全体の動きのイメージやリズムを、動き言葉を活用してつかみ、確かな見通しをもって意識的に追求する姿が見られた。

## (2) 第4学年 ゲーム(ベースボール型)「西っ子ベースボール」

授業者 : 田島 学 教諭

小学校の「ベースボール型」における系統性や身に付けたい力を明確にした上で、教具やルールなどを工夫し、個人の技能を段階的に身に付けながら学習を進めていくことができるようなゲーム化を行った。そして中学年においては、大単元を組み、前半の単元で攻撃(打つ技能)、後半の単元(本単元)では、ボールを止め、ランナーとベースとの距離を考えながら失点を最小限にとどめるための守備ができるように授業を仕組んだ。そうしたゲームの中で、コート図やミニ作戦板を活用して、目指す動きをイメージしながら練習やゲームに取り組み、動きを高めていくことができた。また、ボール操作技能や、身体操作に係る能力を高める運動をゲーム化して準備運動に取り入れ、楽しく取り組みながら個人技能を高めていく姿も見られた。



## (3) 第5学年 器械運動(跳び箱運動)「切り返しファミリー」

授業者 : 井上 誠 教諭

単元の前半では開脚跳び、後半ではかかえ込み跳びを中心技として扱い、突き手による着手技術を、単元を通して身に付ける技術として単元を構成した。準備運動では、馬の背中を突き放し、宙で手を叩いて着地する「手叩き馬跳び」と、腕立て支持姿勢から突き放して一気にしゃがみ立ちになる「腕立てジャンプ」、しゃがみ立ちから突き放しによって再びしゃがみ立ちになる「うさぎ跳び」を、単元を通して行った。また、時間差再生動画やタブレットPCなど、視覚に働きかける学習環境を活用しながら、仲間と動きを見合い、教え合う活動を行うことによって、動きの視覚的なイメージと運動感覚的なイメージをつなげ、体の動かし方への意識を修正・強化しながら動きを身に付けることができるようにした。これらの工夫により、仲間と動きを見合い、教え合う活動を通して、自分や仲間の運動課題を明ら



かにし、課題に合わせて用意した多様な練習の場の中から課題に合った練習方法を選択し、体の動かし方への意識を修正・強化しながら練習に取り組む姿が見られた。また、中間交流会において、前半の練習を通してかかえ込み跳びができるようになった仲間の動きを観察し、動きの視覚的なイメージと運動感覚的なイメージを言語化して交流することによって、準備運動や既習の開脚跳びとの共通点を見出し、体の動かし方への意識を修正・強化しながら意識的に追求し、動きを高める姿が見られた。

### 3 研究協議

- (1) 提案                    司会者： 串田 茂 教諭 (岐阜県小学校体育研究会)  
                              発表者： 田島 学 教諭

#### <本校の主張・提案>

#### ① 運動の本質に基づく教材分析と系統性を重視した指導計画の作成

##### ア 身に付けたい動きを明確にした指導計画の作成

(実践例：第3学年 「開脚跳び」)

##### イ 単元指導計画に位置づける準備運動の在り方

(実践例：第5学年 「切り返しファミリー」、第1学年「跳び箱ランド」)

#### ② 技能の向上に結び付く、思考・判断を高める方法の工夫

##### ア 動きをつかむ力を高める学習環境

##### イ 動きをつかむ力を高める動き言葉の活用

#### (2) 協議内容 (□…質問・意見・感想)

※ 回答は、授業者 (田島教諭, 高橋教諭, 井上教諭)

□ ボール操作技能が低い子供たちにとっては、本時の課題は難しいものではなかったか。

A ベースボール型は「ベースの先取り」ととらえ、それに関わる動きが、身に付けさせたい技能だと考えている。そこで、捕る・投げる技能の低い子供たちでもゲームに楽しく取り組みながら、状況判断力 (自己の投力とランナーの位置に合わせてどこに投げるかを考え、送球する) を身に付けることができるようにするために、コート形状や塁間、得点の仕方などの場面設定やルールを工夫を行った。

□ 着手や突き離しなどが不十分な子供の実態や技の習得状況から、技をかかえ込み跳びに絞った意図は何か。

A 本時「着手位置より着地位置が前になる」動きを学習課題とし、様々な実態の子供に対応するために意図のある多様な場を設定し、一人一人が目的意識をもって学習できるようにした。

□ 本時、突き放す動きはほぼ全員ができるようになった。次時は着地位置をさらに遠くにする事、つまり第1空中局面と第2空中局面とのバランスをとることを、個に応じた様々な場を準備し指導することで、全児童にかかえ込み跳びができることを目指したい。

□ 本時は「守備」に重点を置いた指導がなされたが、単元前半では「打つ」に重点が置かれている。子供たちの意識は、どのように変化していったか。

□ 高学年に向けてコートの高さや角度（形状）などの場の設定やルールなどの発展をどう考えているか。

A ベースボール型ゲームでは、個人技能ではなく、チームプレーで勝つ喜びや楽しさを味わわせたい。前半単元において、子供たちの喜びにつながる「打つ」技能を高めることに重点を置いた指導を行い、技能が十分高まってきたことで、多くの点を取れるようになった。そして子供たちは、失点を減らしたいと願い始め、守備の仕方に対する意識も高まってきた。それを受け、後半の「守備」に重点を置いた単元に入った。中学校のソフトボールの学習を見据えたとき、中学年では簡易化したルールや場面の工夫をしたゲームを開発し、そのゲームの基で守備の仕方（残塁なしの場面での状況判断力）について学んでいくことも大切であると考え、学習を展開してきた。高学年では、残塁を増やしながら、直線型から三角ベース型、ダイヤモンド型へと発展させていく。

□ ゲーム前に子供たちが立てた作戦とゲーム中に教師の指導とにズレがあった。子供の学びと教師の指導とをどのようにつなげていくのか。

□ 本時、目当て（課題）が具体的過ぎて子供たちの気づきが少なかったのではないかと。目当ての与え方についてどう考えているか。

□ 本時は戦術に重点が置かれていたが、チームの特長に応じた作戦とはどのような作戦か。

A ベースボール型は、ボールが飛んだときにどう動くのかも難しく、それが子供の「ベースボール嫌い」を生むと考える。そこでベースボール型では、動き方を丁寧に抑える必要があると考えている。作戦板を活用して、課題の動きを自分たちのチームに置き換え、動き方を具体的にイメージさせる。その後、練習の場で実際に動いて確かめ、ゲームで出来るように指導している。教師は、子供の動きをとらえ、既習内容や本時の課題に係る動きについての指導援助を行うようにしている。そうすることで、子供たちは「できる喜び」「勝つ喜び」を味わい、「ベースボール型」の楽しさを味わうことができると考える。

□ 1年生の指導では、動きの質より量が大切だと思うが、どのように考えているか。

□ 動きを身に付けることと動きを工夫することについての考え方を聞かせてほしい。また、本時の評価規準はどのようにして作成しているか。

A 1年生の子供たちは、星を手に入れることを目的に、様々な場に応じた動きで遊びに取り組んでいた。よりよい星を手に入れたいと願う子供たちに、「ひみつみつけ会」でどう動くときよいか見付けさせ、教師のねらいである価値ある動きの定着を図った。

A 本時は25分間の運動時間があり、準備や後片付けも含めると運動量としては十分であったと考える。評価規準は、これまでの実践や子供の実態から願う動きを身に付けさせるために必要な回数などを決め出している。

□ 本時「動き言葉」を使うことで、よりよい動きにつながったのか。「手に足を近づけて」など具体的な言葉の方がよかったのではないかと。

□ パズル活動には何を求めているのか。また、どのような指導を行ってきたのか。

□ 子供同士の「こうだった（結果）」という活動から、「こうすればいいよ（助言）」という活動にしていくには、どのように指導するのか。

A 「動き言葉」は、言葉で表現したり伝えたりすることが難しい動きのイメージや体の感覚を表現するものであり、仲間との関わり合いの中で、「分かる」と「できる」をつなぐものでもある。

A 子供たちが普段の生活の中で使う比喻表現に着目して、教師が言葉と体の感覚とを関連付けることで、子供の「分かる」と「できる」をつなぐように全学年で指導している。

A 「分かる」と「できる」をつなぐために、仲間との関わりを通して、体で感じたことをお互いに表出し合って、学びの質を高めていきたい。「動き言葉」を使って見合い教え合って、仲間と共によりよい動きを追求させたい。

□ かかえ込み跳びのみの指導ではなく、子供自身が追求したい技に挑戦させるべきではないか。

A 回転系と切り返し系の技では運動の行い方が異なるため、一つの単元で指導することは子供の怪我を助長する恐れがあるので、行うべきではないと考える。

### (3) 指導講評 指導助言 : 中京大学教授 三上 肇 先生

体育授業において、「できる」「分かる」「関わり合う」の比重が、時代と共に移り変わっている。最近では「関わり合う」に比重が置かれる傾向にあり、話し合い活動や相談活動が重視され、技能に関する「できる」「分かる」が隅に追いやられている感がある。「できる」「分かる」と結びつかない「関わり合い」は、体育の本質からすると表面的な印象をもっている。

そのような中、長良西小学校では、「できる」に焦点を当てながら、「分かる」と「関わり合う」を盛り込んだ実践に感銘を受けている。

#### 【ベースボール型の指導について】

ベースボール型の指導をする際に最も困ることは、ボール操作技能の低さから、ゲームが成立しないことである。最近の子供たちはキャッチボールをしないため、それを学校で補償しなければならないが、それには相当な時間が必要になる。低学年のうちから様々なキャッチボールをたくさん経験させておかないと、ベースボール型の指導は必ず行き詰ることになる。そこで、小学校6年間の体育授業のカリキュラムを、全ての先生が理解し、きちんとやり切っていくことが今後の課題で、縦のつながりを意識して授業づくりをしていかないと、様々な領域で中・高学年になってやりたい授業がうまくいなくなる。

中学年のベースボール型の指導計画では、「打つ」を中心とした指導から「守る」を中心とした指導へと計画されている。その中でグループ編制や場面設定など様々な工夫がなされてきた。用具の選定や、ボール選びを特に吟味したことで、子供たちのボールに対して積極的に関わろうとする姿を生み出していた。



「動き言葉」は、「ここをこうしなさい、ああしなさい」と伝えるのではなく、結果的にそうせざるを得ないような状況を作れるものであることが重要である。そして、例えば打つ際の「1・2・3」という言葉が、「動き言葉」として子供の感覚に入っていく必要がある。さらに示された「1・2・3」が、使っていくうちに「1・2——」など、一人一人が「自分なりの動き言葉」に変化させていくことを大切にしたい。スタンダードとなる「動き言葉」の提示

は必要だが、比喩や擬音語、擬態語がよいのか、直接的な“強く押す”などの短い言葉がよいのか、子供の発達段階や実態、また領域などに応じて判断する必要がある。

#### 【跳び箱の指導について】

体育授業の中でも、跳び箱運動中の事故が最も多い。中学・高等学校では、種目選択制の導入されたことや指導する教師側の苦手意識、また生徒の好き嫌いの二極化などから、ほとんど跳び箱の授業は実践されていないのが現状である。中でも、回転系と反転系の技と一緒に学習させることは危険であるということは、十分理解されているとは言えない。跳び箱運動は、回転系、反転系共に助走から勢いを付け、踏み切り板を両足で蹴って跳躍するが、段階的な指導の仕方はそれぞれ全く違うという認識が不十分な指導者が多く見られるようである。反転系の指導では、低い跳び箱では練習させない、助走スピードを上げない、踏切板と跳び箱の距離を徐々に広げるなど、適切な場面設定や運動の仕方を指導することで、事故を防ぐことができる。本時の授業では助走距離が制限されていたが、助走距離を短くしスピードが出ないようにすることで、ねらいの動きである突き手動作を容易にするための配慮である。このように、回転系と反転系とを同時に指導することは危険であるが、同じ反転系の「開脚跳び」と「かかえ込み跳び」なら可能である。また、「台上前転」や「首はね跳び」「頭はね跳び」など、同じ回転系の技を段階的に指導していくことも可能である。ただし、回転系の指導にも反転系の指導にも共通することは、無闇に高さを競わせるものではないということを確認しておく必要がある。



## 4 成果と課題

### (1) 成果

- 子供たちは、学習環境や動き言葉を活用してよりよい動きを求め続けながら技能を高めることができ、運動の楽しさや喜びを味わうことができた。
- 器械運動やベースボール型（ゲーム）についての系統性について、多くの参観者から賛同をいただくことができた。

### (2) 課題

- 限られた時間の中で、指導要領の各学年の目標が無理なく到達できるように、6年間を通して確実に動きを身に付けることができる授業を展開していく。
- 器械運動やベースボール型以外の領域についても系統立てて指導を行っていく必要がある。